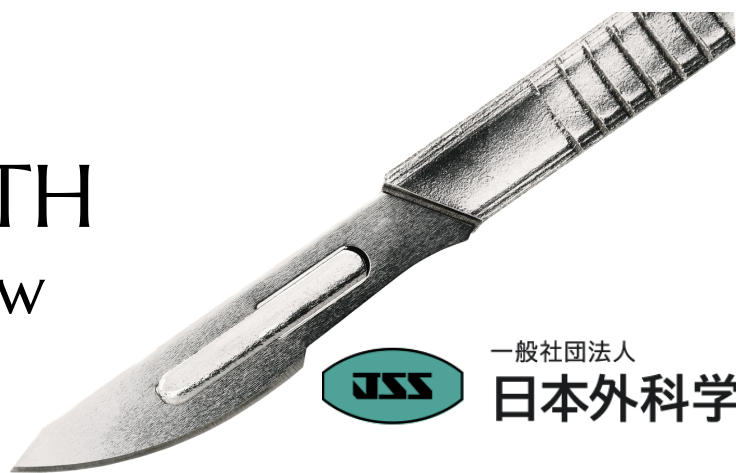


BUILD YOUR PATH

Role Model Interview



小林 良司 先生 内分泌外科医

PART 1 : BUILD 「あなたは何を築いてきましたか？」

Q1. まずは、現在の肩書やご専門、勤務先について教えていただけますか？

現在は大分県別府市にある甲状腺専門の医療機関「野口病院」で外科部長を務めております。

専門は甲状腺・副甲状腺を中心とした内分泌外科です。当院は日本で初めて設立された歴史ある甲状腺専門病院で、2022年7月に100周年を迎えました。西日本を中心に全国から多くの患者さんが集まるため非常に症例数が豊富で、私自身も転向してからの4年間で800例以上の手術を担当させていただきました。

実は元々は呼吸器外科医として10年以上執刀を重ね、呼吸器外科専門医も保持しておりました。

Q2. 医学生や研修医の頃は、どのような医師になりたいと思っていたらいましたか？

実は、元々は精神科や心療内科を志して医学部（大阪市立大学）に入学したんです。学生時代も精神医療の勉強会に参加していて、自分が外科医になるなんて夢にも思っていませんでした。

転機は大学5年の病棟実習で外科を回った時でした。手先を動かす作業が好きだったこともあり、実際の手術や外科手技を体験して「こんなに面白い世界があるのか！」と一気に惹き込まれました。

さらに当時指導してくださった呼吸器外科チームの先輩医師たちが本当に親切で雰囲気良く、毎日手術が終わるとご飯やお酒に連れて行って可愛がってくださったことも、外科へ進む大きな後押しになりました。

Q3. 呼吸器外科から現在の「内分泌外科」へ転向された最大の理由は何だったのでしょうか？

正直に言えば、地域医療の過酷な現場で限界を迎えた「挫折と再挑戦」がきっかけでした。

34歳で地元大分へ戻り、大分大学の呼吸器外科医として二次救急病院へ赴任したのですが、そこでは「常勤の呼吸器外科医が自分1人」という環境だったんです。病棟管理や外来、予定手術はもちろん、胸部外傷などの緊急呼び出しを含め、「24時間365日オンコール」という過密勤務を5年間続けました。

40歳の節目に「この働き方を続けていくのは体力的にも精神的にも限界だ」と判断し、ドロップアウトしました。一時は外科医そのものを辞めることも頭をよぎったのですが、「せっかく培った外科の手技や知識、専門医を捨てるのは惜しい。やっぱり手術からは離れたくない」という思いが勝り、地元で歴史のある野口病院へ「一か八か」で飛び込んだんです。

Q4. 若い頃に思い描いていたキャリアと比べると、現在はどのくらい一致していますか？

これはもう大きく変わりましたね（笑）。

精神科志望で入学し、途中で呼吸器外科医になり、40歳で内分泌外科へ転身したわけですから、若い頃の自分からすれば予想もつかない道のりです。

しかし、内分泌外科という一つの領域を突き詰めていくスタイルは自分の性に合っていましたし、結果的には大正解の選択だったと感じています。

PART 2：PATH「あなたの歩んできた道」

Q1. これまでのキャリアを振り返り、ご自身のPATH（歩む道）を作った大きな分岐点や経験は何でしたか？

私のキャリアを振り返ると、大きく2つの重要な分岐点がありました。

1つ目は、34歳での地元・大分への帰還と医局の移籍です。臨床研修を終えた後、大阪大学の呼吸器外科学教室に入局しました。関連病院で数多くの肺癌手術などを経験し、充実した日々を送っていたのですが、同郷の妻との間に子どもが生まれたことを機に「子育ては生まれ育った地元の大大分でした」と強く思うようになったんです。16年ぶりに大分へ戻り、大分大学の呼吸器外科教室へ温かく迎え入れていただき、新たなスタートを切りました。

そして、最大の分岐点となったのが40歳での内分泌外科への転向でした。大分に戻って大学病院で勤務した後、別府市内の二次救急病院へ赴任したのですが、そこでは院内の常勤呼吸器外科医が私1人という状況でした。外来や病棟管理、日々の手術はもちろん、胸部外傷や緊急の気胸対応などがあれば昼夜を問わず呼び出されるため、「24時間365日オンコール」という過密な生活が5年ほど続きました。

呼吸器外科の手術も仕事も本当に大好きでやりがいを感じていたのですが、40歳の節目に「このままのペースで走り続けるのは、体力的にも精神的にも限界だ」と痛感し、一度立ち止まることになりました。一時は外科医そのものを辞め、訪問診療や施設での勤務へ移ることも考えましたが、「せっかく培った外科の技術や専門医を無駄にしたくない、やはり手術が好きだ」という思いを捨てきれませんでした。

そんな時、地元で100年の歴史を持つ甲状腺専門の野口病院があることに気づき、一か八か飛び込みました。崇高な動機から始まった転向ではありませんでしたが、この思い切った決断が、私の外科医人生の第2章を大きく拓いてくれることになりました。

Q2. 現在のご専門（甲状腺・内分泌外科）ならではのやりがいや魅力は何ですか？

甲状腺癌の多くは進行が比較的緩やかで予後が良い一方で、局所浸潤や多発リンパ節転移を来す症例もあり、抗癌剤が効きにくい「手術の成否が患者さんの命に直結する」という点が大きなやりがいです。たとえ再発を来した症例であっても、確かな外科手技で切除・コントロールできれば長期間にわたって元気に過ごしていただけます。悪性度の高い他臓器の癌に比べても「外科医の技術と出番が患者さんを救う」という実感、ダイレクトな手応えが非常に強い領域だと実感しています。

また、呼吸器外科時代に培ったがん治療の基本戦略や組織剥離、糸結びやデバイス操作といった「外科医としての基本動作」は、領域が変わってもそのまま私の強固な武器になっています。

Q3. 外科専門医の取得や資格の存在は、先生のキャリアにどう影響しましたか？

転職や転勤を経験した私にとって、外科専門医という資格はまさに頼もしい「身分証明書」でした。大阪から大分へ移る際も、呼吸器外科から内分泌外科へ飛び込む際も、「外科専門医を持っている」というだけで、先方の病院から「一定の厳しい修練と症例をしっかりと乗り越えてきた医師なのだ」と客観的に信頼してもらえた実感があります。履歴書に確かなお墨付きとして書ける安心感は、キャリアの節目で本当に心強かったですね。

また、専門医の更新を通じて常に自分の医療を客観視し、最新のエビデンスや技術へアップデートし続けられる点も大きなメリットだと感じています。

PART 3：NEXT PATH「これから歩く人へ」

Q1. もし今、ご自身が医学生や研修医時代に戻れるとしたら、当時の自分にどんな言葉をかけてあげたいですか？

「自分の手で患者さんを治せる外科医の仕事は、本当に素晴らしくて楽しいぞ！」と迷わず伝えたいですね。

もちろん、外科医の仕事は良くも悪くもすべてダイレクトに自分に返ってくるので、責任は重くダメージを受けることもあります。ですが、自らの手を下して手術を完遂し、患者さんが笑顔で退院していく瞬間の達成感は、他のどんな診療科でも味わえない最高のものがあります。

Q2. 最後に、今後のキャリアに悩んでいる若い先生や、外科を目指すか迷っている先生へメッセージをお願いします！

「自分には無理かも」「きつそうだな」と想像や思い込みでやりたいことを諦めてしまうのは、本当にもったいないことです。やってみないと分からないこと、飛び込んでみて初めて気づける面白さがこの世界にはたくさんあります。

迷ったら、安易に楽な道を選ぶのではなく、あえて「ちょっときつそうだけど面白そうな道」へ思い切って飛び込んでみてください。

万が一そこで壁にぶつかったり失敗したりしても大丈夫です。私自身が証明しているように、確かな外科技術と専門医という基盤さえあれば、第2、第3の新しい道へいつでもチャレンジし、楽しく活躍し続けることができます。

自分が執刀した手術で患者さんが元気になり、笑顔で帰っていく喜びをぜひ体感してください。あなたの挑戦を心から応援しています！